

●高澤良一 第十句集 素抱

●四月―六月

上からも下からも人花の山

花筵てふ大仰なもの持たず

腰下ろすとこころへ飛花の次から次

この齡になりて春暁てふものを

愛らしき蒼からしてゆすらうめ

見通して奥行のある花の山

禽ごゑのひろがりすぼまり花の山

のほほんとしてゐし鴨の残されし

そんなことしなくても水温みけり

藪椿こんなところで径途切れ

大根を洗ふ機械かひとけ人氣なし

花菜晴れ漁師は漁に精を出し

花虻ハチマキの音聞キンケく限りきかん坊

これはキンケ粹ロハジロ小さきちよん鬚ある鴨で

をととひのさくらがふつと泛かびくる

さきほどの花も佳けれど此も佳し

人氣ひとけなきときをさくらの旺ひとけなり

ひとびとは立ち去り櫻は残りけり

さゑずりのありかは花の奥の奥

枝移りして花の鳥こゑ大きく

花の山騷がしにくる目白かな

人ごゑが近みさくらがそはそはす

てのひらに飛花を掬へば浮き立つ彩

すいと来てこんどは小柄花の鳥

一通り見せ呉れ目白の軽業芸

ぼちよぼちよと水の流るる芹田かな

さんしゆゆの黄を振り撒くは善意に似て

猫の恋人目なんぞにおかまいなく

さんしゆゆ見て思ひ当たるは鉦のいろ  
鴛鴦装う晴着は大正浪漫風  
花なづなぺんぺん草の名を厭ひ  
犬ふぐり集落のごと點在す  
かりそめに春水の翳生れては消ゆ  
永日の亀の正字に窮しけり  
蝌蚪金澤文庫 称名寺 裏山の國腕白どもに伏せておく  
萍のしんと緑の一帝国  
萍の隠蔽工作始まれり  
耳聾す風天空に花こぶし  
芹摘の中腰に耐え切れずして起つ  
諸葛菜要らぬ戦争引き起こし  
紫荊嘘で固めた戦して  
紫荊一方的に非を難じ  
身勝手な戦の行方つちふれり  
春場所の土を噛んだるはたき込み  
春場所のとんだ所ではりま投げ  
雪柳佛花と決めて幾星霜  
爆撃金澤八景 シーパラダイスの体勢に入るエイを見よ  
驚きのテッポウエビの衝撃波  
オニダルマオコゼの口中ちよと動く  
孫と瞻てナマコ忍者の黒装束  
大海馬背びれひらひら昇天す  
リーファイシードラゴン遊歩の迷彩服  
見つめられ居りて箱河豚ぽつとせり  
おしどり大岡川 観桜に吹雪ける花の余り風  
ペット屋におたまじゃくしの御玉哉  
花吹雪雪洞にまだ吹き足らず  
赤塗りのひょうげ弘明寺 観音 観桜た仁王飛花よぎり  
分葱買ふ弘明寺観音お膝元

この山の一押し桜咲きにけり  
竹の葉散る奥へ奥へと魅せられて  
棒切れで地図を描ける花の許  
花愛野毛花見つる毛唐の大首横濱絵  
横濱の花を観るなら掃部山かもんやま  
紫荊戦はアラ一の思し召し  
この静寂しじま破るものなく朝ざくら  
花屑に風そろそろとたちつてと  
花散らす風の無理強ひしたりけり  
落椿展観幕府滅亡史  
称名寺鴨も花見と洒落にけり  
花愛でて今様本田平八郎  
鳥よりも人よく遊ぶ花の山  
はたきなどばたばた春の楽器店  
花啄まむと鶉身をひねり  
精米所横よりのぼる花の山  
かるめ焼きなど賞味して花の人  
花の蜜くすねに来たる大き鳥  
枝のさきまだ咲く余地のある桜  
何事かまくし立てたり花の鳥  
亀鳴くややうやう主旨が伝はりて  
蔦若葉磨き込まれし芸に似て  
赤銅いろ陸上トラック落花馳せ  
雀の槍生へり英軍墓地の芝  
養花天選拳合戦空う響き  
花吹雪小公園を突っ切りて  
空鳴って風吹く日なりくわりん咲く  
飛花の風辺りが透けて見えにけり  
一つ一つが三千世界しゃぼん玉  
まんまるに直りいびつなしゃぼん玉

驚掴み落花放してみせにけり  
真似して嗅ぎ牡丹に顔をそむける子  
馬刀貝の豎穴住居密集地  
浅蜷掘めぼしきものは乏しくて  
手つかずの浅蜷掘り場の無きものか  
しいしいする孫に干潟の広かりき  
花まるめろ雨が陽気に降り出して  
穴出づる蟻を石もて塞ぐ孫  
脂っ気抜かれ戻れり汐干狩  
指挟まれ大馬鹿貝の糞力  
大道芸祭囃すやオツペケペー  
のれん出す野毛飲屋街虹立ちて  
野毛山の春の夜浅く辻楽士  
穴まどひ間が悪さうに消えゆけり  
うす膩泛く青大将を正視して  
穴出づる虫の裡なるだんご虫  
ぼうたんの咲けばついつい嗅いでみぬ  
花くわりん夜間飛行の灯のちらちら  
販売機春夜連なる灯の區劃  
春なれや見上げてチャンチンモドキの木  
カガミ貝縄文人も化粧ひけむ  
馬鹿貝ばかの舌雀の舌に酷似して  
浅蜷縞流行りの縞もありぬべし  
馬鹿貝の舌を使ひてのけぞれる  
男山道北行酒造雪山正面に  
酒山男山酒造水は万年雪水男山  
和寒わっさむの防雪林横ふきのたう  
白樺の用途かつてはスキー材  
秋秋つこは秋蒔小麦つこと土地人の云ふそのみどり  
町木はヤチダモ残雪うち敷きて

道北の残雪退いて里青む  
榛の木の芽吹きまだまだ天塩川  
家ぽんと置いて名寄の雪間かな  
押麦浜頓別を白鳥に撒く作業員  
白鳥のあれゆく浜頓別のそら  
皆若く白鳥撮りのテレビクルー  
白鳥の録音係こゑ拾ふ  
白鳥の放送中継風の音  
目の子算ざつと一万コハクチヨウ  
鮭トバでちびりちびりと男山  
あざらし宗谷岬の腹の上なる春入日  
隈笹に残る雪見て最北端  
海猫の糞皚々宗谷暮れんとす  
野寒布ノシヤツプ岬と宗谷の間の昼がすみ  
利尻島霞もやもや引き出せり  
訛り暖かガイドは礼文高校出  
ふきのたう全島まかなふ発電所  
昼食に煮付礼文の黒\*黒がしらは鱧のことがしら  
まなかひに礼文近みて春かもめ  
礼文沖ほつけを追ふか木つ葉舟  
きうきうと海猫鳴く岬カスベエ干す  
海猫・鴉ごちやまぜ礼文の風に乗  
海猫退けて埠頭を占むる島鴉  
潮青む礼文を皮切り雲丹採漁  
沖ゆくはりマン海流カスベエ干す  
突き進む船首礼文は霞みづめ  
海上に利尻全容霞切れ  
海上に霞める利尻その内着く  
岳樺呑み込む海霧の迅さかな  
須古頓の風に揉まれてほっけ干す

蜻漁のその大方は朝の内  
フエリ利尻島ー追ふ春の鷗の数減りて  
アトリ来て島は渡りの中継地  
春光をやはらかに投げ利尻富士  
利尻町春寒灯の入る赤提灯  
父ちゃんと母ちゃん居酒屋焼ほっけ  
活ホタテ開きほっけに地酒酌む  
利尻メカブおじやうましよ当店は  
値の張って然り利尻の厚昆布  
島土産利尻昆布のピンからキリ  
親方小平町の漁場差配あかけつとうの赤毛套  
春の蠅番屋の客に蹤いて来ぬ  
留萌川留萌留萌本線春景色  
玲瓏と雪頂しよかんべついて暑寒別岳  
又の旅夏と定めて青富良野  
畦青み雪嶺ちっぶべつしざり秩父別  
榛芽吹かむいき神居古潭こたんの川景色  
富良野産ラベンダー入り線香とよ  
氷点下四十一度てふクツキー  
杜覆ふ青葉の階調宜しけれ  
散りしきる桜に欲しき越天楽  
模糊と見て桜のなかに末期の眼  
その頃となれば花見に徒心  
遠浅の海の牧場にあめふらし  
浅蜷掘道具倒れと云うがあり  
潮吹が鳴いて潮時告げてをり  
人様ひとさまの馬穴覗くは浅蜷の多寡  
厨房に浅蜷のぞめきうしみつ時  
馬鹿貝の塗り剥げたるはもう齡よ  
この感触大馬鹿貝に他ならぬ

砂抱いてか黝き馬刀の虚せ貝  
海牛の頭上を跨ぎ浅蜷掘  
試し掘り干潟のあちらこちらかな  
汐干狩擡ぐ尿意を如何にせん  
皺苦茶婆貝を剥くやら蠅追ふやら  
庵原より宅急便で新茶着く  
新茶淹る湯気の向うに送り主  
茶摘み畑手送り主曰くが回らねばうち捨ておく  
櫂若葉して石畳冷え込めり  
面白さうに剥く踏なれば私にも  
蜥蜴の腹なんぞ見をればもう昼どき  
第六感当り風船逃がしたる  
籠枕ことしの頭慣らしをり  
ゴールデンウィーク籠りて何すべく  
干鱈など水に戻してとる昼餉  
緑陰の雀とんとん走り根越え  
観音の胸元よぎる初燕  
玉繩大船 竜宝寺の一寺手広く芍薬植え  
一休の数ある頓知芍薬玉  
桐の花寺の和尚はむらさき好き  
花殖やす和尚の心根矢車草  
桐の花ぼかんと眺めゐしが去る  
桐の花先代の顔もう忘れ  
買物籠菖蒲の尖が見えてゐる  
葉菖蒲の香ごとくるめり新聞紙  
春になり雀烏と名の付く草  
鳥雲に人は葬り葬られ  
キツネノボタンその実みどりの金平糖  
拾ひ来て海髪より造る美顔水  
石蓴搔だぶつき気味のゴム胴着

種あかす手品などみて目借時  
翻車魚の肝和え春と思ふべな  
端午の湯踵きれいに磨きけり  
野遊びに女はあてにせずにおこう  
ほんぽんだりあ昔は良かった能く遊んだ  
菖蒲湯にざっと浸りて若返る  
葉菖蒲の邪気祓ふ氣にあやからん  
釜利谷のをばさんの売る地のトマト  
渡り蟹甘藻の林はすかひに  
古きよき時代の垣花ねずみもち  
新茶なみなみ注ぎていつもの日の始まり  
ともかくも昔はよかった錢葵  
芍薬の一念三千想ひ玉  
樟の花八幡神社鎮めけり  
いかづち雷に出し抜かれては道急ぎ  
朝の蛾のかぶさる露の葉の一つ  
緑陰に未練残して去る素振り  
角刈の舁き手匂へり三社祭  
男梅雨おろかに肥ゆる榊大樹  
ひめじよおん朝方一度降ったきり  
いないいないバアを決め込む梅雨入富士  
緑さす窓を雨滴の徒競走  
梅雨の玻璃阿弥陀籤めく雨滴馳せ  
川幅をゆったりと持し梅雨大河  
父の日の昼をふんぱつ勝烈庵  
横浜駅西口梅雨のアンブレラ  
萍をひっくり返しゆく大雨  
鳩も目をくりくりさせぬ青あらし  
でんでん虫雨が当りて角曲げぬ  
屋蛙愚の骨頂と啼くなめり

雨のあと薔薇壊す風ありにけり  
湯西川  
ハンカチをすこし余分に旅支度  
山藤のむらさき散り込む魚道あり  
分け入りし山ならではの一新樹  
ニュートリノ天網を抜け新樹山  
ニュートリノ達してをらむ新樹山  
敦盛草母衣らしきもの抱え初め  
林間にさんざめく鳥新樹雨  
前山の新樹に吸はる昼の雨  
新樹山臨みてアイスマルクかな  
出湯出づ脛のすうすう新樹冷え  
山女釣荒くれ岩をひよいひよいと  
一行の瞬き仰ぐ新樹雨  
山径を降らるるままに新樹雨  
身の内の門外れ若葉の湯  
新樹雨顔にぽつんとあとばらばら  
鳥ごゑの語尾尻上り新樹山  
新樹雨四辺を打ちてまたたく間  
大粒となりて新樹を襲ふあめ  
新緑に慣れたところで山下る日  
写生して山の新樹のもくもく感  
河原石皚々天より下り藤  
藤見事見事とぞとこゑ車中より  
花あけび引率の子は上級生  
山峡の燕巢造りこれからよ  
新緑の此岸に村はかたまりて  
新緑の押し寄せてゐる一山村  
新樹高しいつまでもゐる鳥の向き  
花通草物音一つたてぬ村  
栃若葉山の天氣に恵まれて

岩魚の瀬すこし上ミ手に山女の瀬  
桐の咲く民宿で売る遊魚券  
路を過ぐスクールバスの空車  
オムレツのやうにやはらか新樹山  
旧道は細々常磐木落葉みち  
山藤とおぼしきが垂れ向ひ山  
奥鬼怒川温泉  
バードウイーク森のみどりに染まるべく  
代田水いまにも雨が降りさうに  
いつ降ってもよささうな空花空木  
雷いかづち又雷尾根の新樹を震はせて  
雷は会津の方よりそれつきり  
板の間に落つかなぶんの硬き尻  
湯疲れのそこはか溜る新樹雨  
湯けむりも櫟若葉ももくもくと  
杉落葉積もり旧道絶えだえに  
新樹山鬼怒川温泉連なるまゝをスケッチす  
若葉風温泉街に吹き込めり  
夏草目黒自然教育園にかにつりぐさといふがあり  
水垢の亀にも年季梅雨に入る  
牛蛙人さしかかれば音の詰る  
目に余ることも鴉の子育てどき  
軽鳧の子の一羽後塵拝しけり  
軽鳧の子の入り来るを待つファインダー  
軽鳧の子の従順なるとならざると  
葭叢の中に蜻蛉の通り道  
この沼を往き来蜻蛉の二匹は居る  
眼中に吾無きごとくやんま過ぐ  
沼底のどぜうの欠伸ならむ泡  
糸蜻蛉進むリズムはピチカート  
十葉にも植物園の標示札

蛇ながむしの唯々通り過ぐを待つ

糸とんぼ茎に取り付くその角度

水馬未だ埃の大きさに

あぢさゐの雫を浴びぬやうに抜け

燈心蜻蛉とうすみは瑠璃一色の針とんぼ

羅慈恵医大に患者付き添ひ過ぎにけり

診察室二十番出て梅雨の街

一患者ふうふう云ふて団扇風

病廊病院売店にてに外来患者あふれ梅雨

商品のお出かけメイトは梅雨の杖

もうそんな頃かや屋上ビアガーデン

ざくろ咲き通院かんかん照りの道

吹き起こる白南風長湫剛の唄

アマリリスラジオのヴォリューム一杯に

堅干しの箸\*カスベエはエイのことリカスベエ晩酌に

梅雨のラジオ早口にしてくだくだし

斯く肥えて押しも押されぬ獅子頭

廻り道する赤蟻に事情あり

更衣即ち着古るし作務衣かな

柏餅誰にでもある佳き時代

大味な彩のつつじに飽き飽きす

酒気帯びて男はさうよ神輿舁

奇想曲薔薇にふさはしプッチーニ

あぢさゐののっぺらばうがうすぼんやり

冷奴地震の起こるメカニズム

一人留守おおせつかればががんぼ来

萍の支離滅裂か整然か

ビール酌む礼文カスベエむしりつゝ

斑ぶちなるは猫のみならず金魚にも

ひよいと思ひ出したる蚊帳の入り方

変なこと覚えてゐるよ瓜の種  
鴨居見て蚊帳の吊り手の懸け方など  
かたばみの花見るものの無ければ眺る  
蝮の道当てありさうで無ささうで  
いぶかしみ見て過ぐ蝶の菟まる木  
老眼と乱視ごちやませ梅雨をみる  
雨の赤つつじぴんぼけ眼鏡の度  
角振りてでんでんむしは唄ふ虫  
いんげんの季節の三色御飯かな  
尺蠖の探り直せる空の奥  
納豆菌掲げて健康食品売る  
蕃茹に塩振りすぎとこゑありにけり  
江戸川区金魚ガイドを取り寄せて  
グラビアの風鈴に耳すましけり  
たはむれにモンローウオーク南風のなか  
ほら見てよ薔薇が奇麗よあんた達  
椎咲いてむっとするなか狸穴坂まみあなざか  
皆百円香奠袋も虫籠も  
屑籠は大きめが佳し夏はじめ  
三夏その首夏告げわたる風なりけり  
用足して丸善に寄る東京首夏  
草々の容をなぞり夏の蝶  
黒揚羽すと消え飛石あるばかり  
こんなにもベルト重たき夏ズボン  
ハンカチは嗜みのうち忍ばせぬ  
蛇くちなわを滑り込ませて沼無風  
すすむ胴水に密着させ蛇くちなわ  
蛇の舌まざと脳裡に刻まれぬ  
蛇よぎる水脈須臾にして跡かたなし  
水上を突き進む蛇不敵なり

蒐まつて軍団めける水馬

六月のピザ生地寝かす雨の昼

引っぱれば飛び出すティッシュ走り梅雨

蚊の姥が雨に追はれて玻璃にくる

サイダーの大きなげっぷ墓めける

夕立のそのたまさかに苗倒る

こ奴めとお小言貰ふ藪からし

油虫に手を施すも出るには出る

手に当てて切れ味試す鋸草

葉山沖わたるアンドンクラゲかな

ヒザラガイ見るさえ薄暑覚えけり

銚摺あひすしのヨット馳すなり薔薇の窓

原色のボデイスーツに梅雨のダイバー

その華麗なること水を蹴るくらげ

水を掻く分だけすすむ海月かな

梅雨払ふ笠置しづ子のよいわんわ

これなんとかしなくちゃ十薬はびこる庭

ちよんまげが街練り歩く開港祭

白南風埠頭帆船フアンで賑はへり

鮎どきの佳き風のくる酒匂川

再生紙裏も使えと亀鳴けり

釣人房州に野暮富浦な問い掛け梅雨を云ひ

半分は遊びの鱧の渚釣り

この先に径無ささうで浜大根

天草てんざとり探序てんざとりでに引ききし鶏冠てんざとりのり

現八犬飼の麻張現八り房州団扇かな

釣り上げしねずっぽ三匹缶いもからに

釣人のにべ無き応えボソと梅雨

梅雨の航連れ添いもう鷗宜ようそ候と

甚平着見て振り返る甚平着

甚平の好きがわかってくる齡  
甚平の紐結ふ手つき馴れてきし  
往き交へる螢大きな方を追ふ  
毎日を氣樂に氣樂にかたつむり  
午後からの梅雨のやつつけ仕事かな  
寝そべりてクイズを解ける梅雨畳  
団扇と辞書放っぽらかしてある座敷  
手に届くところに団扇のある生活たつき  
蜘蛛の困に病葉二、三ちらし掛け  
その後のことはどうでも団扇風  
ペデュキュアの女ヨットに乗り込めり  
変はり映えしない団扇をことしも亦  
雨上りわけても枇杷の雨雫  
ビール乾し辺りの風がぬるくなる  
脛打っていまいましきは夏机  
糸を垂るそばから鯨が掛かりけり  
いまもってご贖肩があり氷店  
にゆうべえと蛸漁の沖見渡して  
吾が前を走りゆく蚊に手を出さず  
さつきから目くじら立てゝはたた神  
トマトに振る塩目分量一寸過ぎし  
時の日や曜日たつきに疎き生活ぶり  
出来悪き坊主のやうな路地の枇杷  
管理人室の横手の枇杷たわわ  
書き止めし句のたわい無し昼寝あと  
傷み方あれこれありて古団扇  
蠅帳の見当たらずぬ世も亦佳きか  
みな清潔に蠅帳の失くなりぬ  
直ぐ崩れては形なしの入道雲  
日射病倒れし若き日の出張其処はジャカルタで

水中りの洗禮を受くジヨクジャカルタ

その嘔吐鮮烈にして水中り

夏瘦術後回想せて拝み太郎の湯浴みなり

心太冷水もって口直し

何處からか蠅の入りくる家なりし

射干や家を毀ちて家が建ち

表札の町名旧きまゝ梅雨へ

蝸牛程の私の運動量

銭湯の跡地射干咲いてをり

ピーマンに日は差しながら雨の降る

古団扇骨傷みして風へなへな

父の日の素足すうすうしてゐたり

ずぶ濡れの螢袋の一輪挿し

露零す螢袋に道草す

花しやうぶ見つめて風の見えるまで

父の日の加賀鳶の封切りにけり大吟醸

夏空馳すアンパンマンは強かりき

黴どきのバイキンマンをやっつける

保もつまいとおもふ空から五月雨

虫籠に蜥蜴を入れて兄貴分

萍の收拾つかぬざんざ降り

栗の花しどろもどろとなる天気

蜜月八景島の真シーパラダイスつ只中の白詰草

若者の手をとりにあるく白詰草

遊船の波切り進む白詰草

おもはゆき振花の辺に汝と坐る

檳榔樹ヨットスクール開校中

あぢさゐのスケッチブック絵葉書大

携帯電話ると四葩の辺に受けぬ

大南風途絶えてへなへなヨットの帆

ヨット操る男サルビア色のシャツ  
みずくらげワルツのステップ踏むごとし  
山車出して風に当てをり祭月  
仲違ひダチュラがそっぽ向いてゐる  
火取虫飛び廻る輪を拵げつゝ  
青簾風に色目を使ひけり  
物音をはばかり起きれば梅雨雀  
明易の誰か蛇口をひねる音  
短夜の体内に水ゆき渡らす  
五家宝に居る居る蟻の偵察隊  
掃除機に追はれて梅雨の部屋を退く  
火取虫光輪放ちつつ飛べり  
ががんぼの五體満足あひ暁の棧  
金魚の名アズマニシキは四股名にて  
梅雨どきの何處を見据えて金魚の目  
葉桜の毛虫垂るるによき暗さ  
雨上る地明りのして立葵  
かう派手に這ひ回られては蟻退治  
板の間に蟻打ち据えてぺったんこ  
屑籠に蟻の潜伏発覚す  
菓子屑を嗅ぎつけ来たる蟻ならん  
家に入る蟻の根絶やし寝巻被て  
風横浜の綾自然観察の森捉えて螢上昇中  
風絶えて螢の宿は藪臭き  
螢との交信何を以てせん  
突如吹く風に螢の灯を落とす  
螢発つ粋な噂の起つごとく  
棲み分けてここは源氏の螢谷  
迅きこと飛脚のごとき螢なり  
ほうたるを吹き消す風と点す風

手探りの径をほうたる点し呉れ  
ほうたるに殴りかからんばかりの風  
ほうたるの風に浮き名を流すごと  
大風に蛍あはてゝ落つこちぬ  
風出でて蛍の宿の早仕舞ひ  
楠雫砂地をうがつ男梅雨  
早起きが徒の寝不足籠枕  
湯上りの団扇はどこだここに無し  
新じゃがの入る料理なら何でもよし  
毛虫居るだけで全てを物語る  
十薬を引き来しと云ふ言無けれど  
手に当るものはと見れば藪蚊なり  
新じゃがの薄皮ほどの幸せも  
金魚屋のグッピーの眼が忘れられず  
振花のういういしさがこみあげる  
海に水母陸にあぢさゐ漂へる  
吸呑みのやうな花つけすいかづら  
あぢさゐの色脱けて雨締め無し  
甚平の食い込む紐をゆるめをり  
雨の夜をいやに元気な蚊が出でて  
ほじくれば幾つも出てくる西瓜種  
飲み頃と持ち出してくる梅酒瓶  
定年後扇子が家に遊びをり  
大リーグ観戦団扇持ち替えて  
父の日のあらためて見る脛なりけり  
徒然に梅雨の抽斗開けてみぬ  
石垣より吹き飛ばさるる蟻見たり  
膝小僧うらはずかしき半ズボン  
雨乞に獺おその真似事したりけり  
醤油壘押さえに梅雨の置手紙

宅配の人にあはてる裸かな  
相応の薔薇の門あり領事館  
マタドールレッド激しやカフエの薔薇  
繁茂せる十葉へたに引かぬがよし  
たはら麦程の軽みの一句欲し  
花合歡に曇天覆ひ被さりぬ  
からつきし雨に弱くてたはら麦  
金魚屋の布袋草よく肥えてをり  
薔薇どきの噴霧器門に置き忘れ  
気まぐれ梅雨降ってきたかと取り込みもの  
大濤に手玉にとられみずくらげ  
水は尿にゆつくり変はり明易し  
夕立熄み雨音の輪を狭めくる  
曼陀羅華咲けば豆州の妻良おもふ  
旺孫なる夏に生まれて嬰の名美み雨う  
ありとあらゆる容器並べて水遊び  
ごろ寝して畳の蟻に親しめり  
あぢさゐの花のあはひの水の膜  
あぢさゐの精気そろそろ脱けてくる  
濃紫陽花雨の塊り落しけり  
山青葉妙本寺もって客人饗す寺  
カサブランカとかや云ふ百合咲き出せり  
雨音に追いかけるゝ蜥蜴かな  
振花の根がぶち切れて口惜しかり  
麦焼酎あほりあほりてカチャーシー  
草蚩そこそこ指さすさき  
夜の蟻携帯電話を跨ぎ越ゆ  
ピーマンを多めに妻の手製ピザ  
トマト好き故にピザ好き紅茶好き  
半夏生ピザの具手を替え品を替え

この暑さ身体を馴らす他なければ  
気休めの団扇あふぎとなりゐたり  
纏はりつく暑さは開き直りても  
ビニール製団扇の朝顔色褪せず  
コンビニ妻に行くにも帽子・夏手套  
こんな日はビールが佳けれ酢のものに  
打水の垣越ゆ水の一塊り  
鉢底に貰はれて来し金魚の眼  
しばらくは貰はれ金魚の品定め  
まだ鉢に馴れぬ金魚を寝しな見て  
灯して鉢の金魚を散らしけり  
熱帯魚所帯臭さを捨てゝ見る  
金魚など飼うて年金暮らしの身  
金魚また死なせてしまふ金魚運  
萍は破れし穴を繕へる  
あやふやなサイダーの味雨籠り  
暁の虫音交りの雨降れり  
合歡の花風に散々雨に散々  
ごたごたと物を置かぬが夏座敷  
緩きものが肌はがねが覚えて更衣  
病葉落つ 鋼はがねの音を立てゝ落つ  
夏の雨白黒映画の画面ぶれ  
蜘蛛の困に捕られし顔の後始末  
笹正宗鯉山椒にすすみけり  
干しわらび乗りて会津のわっぱ飯  
夏座敷豆麩浮かせて会津椀